

上田 篤 著

日本人とすまい



岩 波 新 書

E75



上田 篤 著

日本人とすまい

岩 波 新 書

884

上田 篤

1930年大阪に生まれる
1954年京都大学工学部卒業
専攻—建築学, 比較文明論
現在—大阪大学工学部教授
京都大学教授
総合研究開発機構理事
著書—「生活空間の未来像」
「日本都市論」
「人間の土地」
「ユーザーの都市」
「町家・共同研究」(共著)
「京町家」(共著)

日本人とすまい

岩波新書(青版) 884

1974年3月20日 第1刷発行 ©

1979年8月10日 第9刷発行

¥ 320

著 者 うえ だ あつし
 上 田 篤

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

畳	床	障子	窓	戸	壁	柱	屋根
.....							
六五	五七	四七	三九	三二	三二	二	一

目次

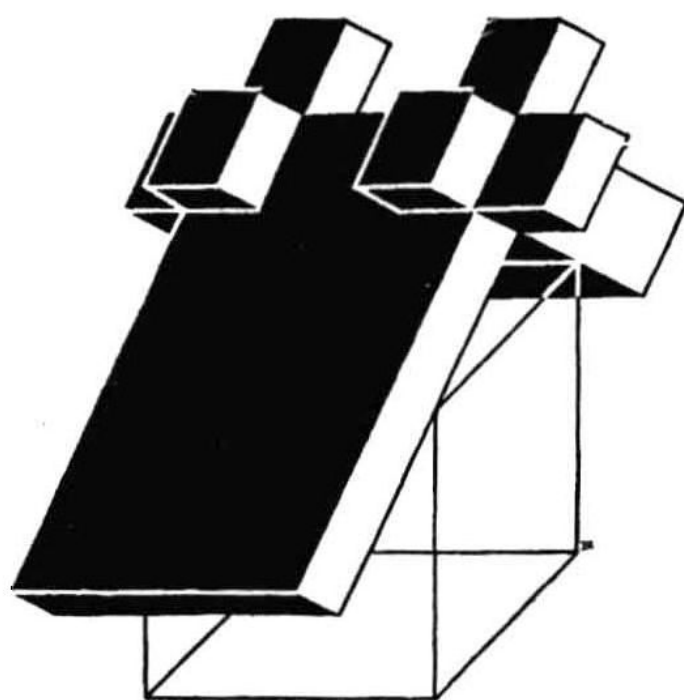
軒下	物置	地下	物干場	屋上	二階	階段	天井	土間	床の間
.....									
一五七	一四九	一三九	一三一	一二三	一一五	一〇五	九五	八五	七五

目次

縁	庭	東	垣	門	錠	あとがき
.....		屋				
一六五	一七三	一八三	一九一	一九九	二〇七	二一五

カット..久谷政樹

屋 根



日本における建築の近代化の歴史は、屋根除却の歴史である、といってもよい。ここにいう屋根とは、傾斜のついた屋根のことで、ビルの屋上などの陸屋根^{ろくけ}、つまりフラット・ルーフのことではない。

さて、そうやって現代の建築をみると、ビルでもアパートでも、新しいものには、屋根がない。鉄筋コンクリートづくりのテラス・ハウスや、モダン・リビングなどでも、ことさらに屋根は除却されている。明治のころの建物をみると、れんがづくりの洋館にも、屋根はのっかっていたのだが、いまでは、それらはもう古くさいもののように感じられてきている。

もともと日本建築は、屋根にそのデザ

インの粹をこらししたものだ。切妻、入母屋、寄棟などのさまざまな屋根の形、千木、堅魚木、鬼がわら、卯建などの多くの屋根の装飾品の存在は、そのことをたんにしめしている。いなかへゆくと、屋根がすっぽり軒ふかくまでかぶっていて、とおくから見ると、家全体が屋根だけでもあるかのような、わらぶきやかやぶきの農家をみかけるが、なかなか風情があっていいものだ。建築のシェルター（おおい）機能をさして、「日本建築は屋根、西洋建築は壁」とかんがえられてもよさそうな光景を、それはしめしている。そういう日本建築の屋根が、「近代化」のかけごとともに、だんだん少なくなっていくのは、さびしいことである。

ところが、近代化＝洋風化とかんがえられるその本家のヨーロッパへいってみると、新しいアパートなどにも、いぜんとして屋根のついているケースが多い。北欧やイギリスのニュー・タウンなどでは、とくにそれが目だつ。その理由は、きわめて簡単明瞭である。というのは、建物の最上階に屋根があると、階下のへやの保温になり、屋根裏を物置などに利用することができる、そしてなによりも大切なことは、雨もりのしないことである。かんがえてみれば、フラット（水平）の屋根よりは、傾斜のついた屋根のほうが、水はけがよいにきまっている。屋根が破損したときも、かわら屋根だと部分的補修ですむ。ところが、アスファルトの上に軽量コンクリートをうちこんだフラット・ルーフでは、そうはいかない。いったん雨

がもるとなると、コンクリートをみなはがさなければならず、これはたいへんなことだ。

住宅公団が発足した当初、アパートの屋上からの雨もりがあいついだ。そして、いまなお公団住宅は、雨もりに悩まされることから解放されていない。私の友人が勤めている建設省建築研究所は、三階だての鉄筋コンクリートづくりであるが、その三階は、年中、屋上からの雨もりにこまっているそうである。なにしろ建築の専門家たちばかりがいるところだから、いろいろやってみるのだが、いっこうに雨もりは解消しない。けっきょく、建物が老朽化したためだからしかたがない、ということになっていくらしい。鉄筋コンクリートづくりが、三〇年そこそこで老朽化するのも問題であるが、これはひょっとしたら、建築の考えかたに、なにか根本的なまちがいがあるのではないだろうか、とかんがえこまざるをえない。原理的には、プールの壁や床などを施工するのと同様に、アスファルトの防水工法を屋上にもつかっているのであるから、フラット・ルーフでも雨もりがおきないはずだけれど、かんがえてみると、屋上は建物でもいちばん風化されやすいところである。長年月のあいだには、いろいろと故障もおきてくる、ということを経験にいかしておかなければならないのではないか。

屋 根

そうやって世界をみわたしてみると、フラット・ルーフの多いのは、地中海沿岸やアフリ

カなど、雨の少ない乾燥地帯ばかりである、ということに気がつく。雨の多いイギリスや、雪のつもる北欧では、建物のほとんどが屋根つきだ。ところが、日本は、雨の多いモンスーン地帯に属している。雨の対策は、むかしからこの国の家屋の構造にとって、重要な課題であったはずだ。それなのに、どうして「近代化」とともに、建物から屋根が除却されてゆくのであろうか。雨ばかりではない。冷房完備がのぞめるわけでもない庶民のアパートの最上階では、屋根のないフラット・ルーフのために、人びとは、屋上からの輻射熱をうけて、むしあつい夏の夜を、苦痛にたえてすごさなければならぬ。

そうまでしても、建築家がモダン・ビルディングから屋根をとりさる理由のひとつは、建物の「近代的」美観である。では「近代的」とは、いったいどういうことなのか。

人工石をつくる、ということは、ヨーロッパ人の永年の夢であったが、一九世紀に、フランス人のモニエやアンネビックらが、石とセメントをまぜたコンクリートを発明し、これに鉄筋を補強した鉄筋コンクリート構造を登場させるにおよんで、建築のつくりかたに一大革命がおこった。それまでは、世界各地のそれぞれのところで産出する土着的な建築材料——石、れんが、木などをつかって苦心して建物を建てていたが、鉄筋コンクリート構造が発明されるようになると、人はいとたやすく軽快で強靱な建物をつくることが可能になる。さら

にコンクリート構造は、ちょうど鉄を鑄型にながしこんで鑄物をつくるように、どんな形にでも自由自在にできる、という特性をもっているので、材料を極力節約した経済的な構造の追求がおこなわれた結果、ここにマッチ箱のような単純な幾何学的構成の建物ができあがった。そして、その材料——鉄、砂、セメントなどは、比較的どの国でも、容易に手にいれることのできる普遍的なものであるから、経済性にくわえて普遍性をもったこのような建物のスタイルを、人びとは、インターナショナル・スタイルとよんだ。こうなると、いままでの装飾性をもった建物は古くさいもののように感じられ、構造の経済性に忠実な幾何学的造形こそが近代的スタイルである、と人びとはおもいこむようになったのである。

とはいっても、高層のビル建築には、たしかに「マッチ箱スタイル」のものもあらわれ、てはきたが、住宅となると、かならずしもそうはいかない。人びとはなお、屋根のある伝統的なスタイルをこのんだ。水平屋根をもつ「マッチ箱スタイル」が住宅にもあらわれたのは、第一次大戦後のドイツの深刻な住宅問題のなかで考案された「最小限住宅」や「規格住宅」の実験にはじまる。その様式が、第二次大戦後には、発展いちじるしいアメリカの中西部に数多く建てられた中・上流の「モダン・リビング」にうけつがれ、新しい時代の生活様式——アメリカン・スタイルとなって、グラフ雑誌などにより全世界に紹介されたのである。

新しいもののすきな日本人が、さっそくこれにとびついたことはいうまでもない。

しかし、乾燥したヨーロッパ大陸中部や、アメリカ中西部の住宅などで発達したそれが、はたして、湿潤な地帯でも、「近代的」で、かつ「美的」なものであるうか。日本とよく似た気候をもつイギリスでは、いまなお住宅に屋根のあることは、絶対的な条件のようにかんがえられているし、また、北欧には、屋根のある美しいアパートがいっぱいある。アメリカでも最近では、個人住宅はいうにおよばず、アパートにも傾斜屋根をのせたスタイルのものが、建築家の新しい作品として、つぎつぎに発表されているようだ。そういうのをみていると、「マツチ箱スタイル」をもって近代的美観とするのは、世界の一面をしかみない、皮相的なものにすぎないのではないか、とおもわれる。

さて、わが国の建物から屋根が消えさるもうひとつの理由は、建築基準法による高さ制限であろう。屋根があると、その屋根の最高部の棟の高さが建物の高さとされるため、人びとは少しでもスペースをひろげようとして、屋根をとっぱらう。土地が、目の玉のとびでるようにたかい昨今では、むりもない。しかしそれは、こんごのひとつの研究課題であろう。というのは、建物の高さのうち屋根の部分は、高さ制限からはずしてかんがえることもできるからである。たとえば、建物の高さ制限が、地震などにたいする建物の防災のためであるな

ら、安定した構造の傾斜屋根は、そんなに問題にはならないし、またそれが、隣地や道路への日照の確保のためであるなら、屋根の傾斜の角度や方向を、太陽の高度にしたがって配置すれば、あまりまわりに影響をあたえないですむ。そうすると、傾斜屋根の部分は、法定の建物の高さからはずしてかんがえることもできるのである。そのばあい、屋根裏のスペースは、機械室や物置に使用し、人びとの居室にすることさえしなければ、建物の質の低下をまねくこともなく、収納スペースをかえってふやすことができる。さらに、屋根の下のへやの保温にもなり、雨もりもふせげて、すべてがよいことづくめになるのではないか。

もちろん、傾斜屋根ができると、そのぶんだけ背後の建物からの眺望が悪くなる、という問題があるが、しかし、たいていのフラット・ルーフの屋上はうすよごれているから、そういう空間をみせつけられるのも、あまりいいものではない。かえって、かわら屋根のうちつづく、しっとりした町なみが展開すれば、都市の美観の向上にもなるではないか。

日本の庶民住宅がかわら屋根を獲得するまでには、苦闘の歴史があった。お寺やお城などの建物には、古くからかわら屋根がのっていたが、庶民住宅にかかわら屋根がのるようになってのは、近々二―三〇〇年のことにすぎない。身分制秩序を維持するためと、経済的貧しさ、それにくわえて、戦国時代には、城の攻防戦のときに、庶民住宅はいつでも焼きはらわれる

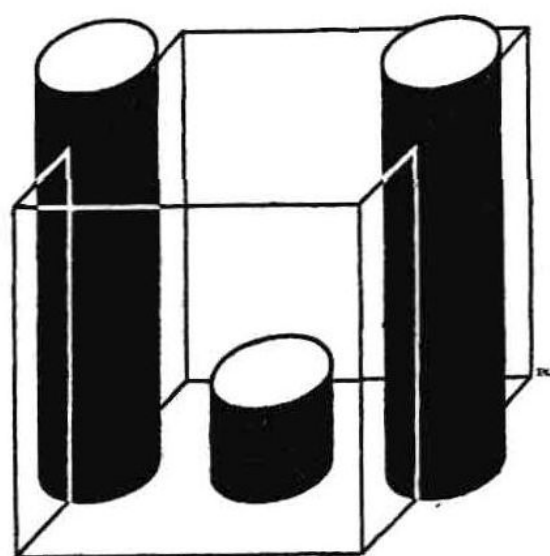
たきぎとして、敵方のみならず、城主からもあつかわれてきた。そのために庶民住宅の屋根は、板ぶきか草ぶきの貧しいものにとどめおかれて、暑さ、寒さ、それに雨もりと火災の恐怖に、いつもさいなまれてきたのである。禁制がとかれて、庶民住宅にもかわら屋根が普及するようになったのは、江戸時代も中期以後であり、それは平和と、庶民の経済的実力の向上、および都市化のすすんだ結果である。そして、雨のもらない、火災のおそれの少ないかわら屋根をもつことによって、日本の庶民の小屋が、はじめて家らしくなったといえるのである。

そういう歴史や家にたいする觀念が意識されているためかどうかはしらないが、いまでも日本人の心の奥底には、屋根にたいする憧憬がひそんでいるようだ。たとえば、官製の公営や公団のアパートには屋根はないが、民営のマンションになると、屋上の手すりなどを屋根の形にして、下からみると、あたかも屋根のついているがごとくにしてみたり、でなければ、ペントハウス（塔屋）に垂直状の屋根をはりつけたりして、たいてい、なにがしかの「屋根」があるものだ。公団アパートとマンションのちがいは、このような「擬態の屋根」があるかどうかだといわれるくらいである。建築家と役人が「結託」して、この国のすまいから屋根をとりさったが、庶民は、なお、家に屋根を欲していることのそれはあらわれではないか。

もうしわけのようについているマンションの「屋根」のなさけないデザインをみていると、この国の有能な建築家たちが、もう少し新しい屋根のデザインに心してもいいのではないかとおもわれる。じっさい、都市的にみてもマッチ箱をならべたような町なみというものは、「墓標の林立」とか、「刑務所団地」などと悪口をいわれるように、景観の味けなさをみせつけるものがある。日本の歴史と風土にはぐくまれた傾斜屋根をすてて、ただ「近代的」デザインや目先の経済性のためにフラット・ルーフにとびつく、というのを、このさい一考するとともに、建築基準法もまた、一部の西欧の「近代化」の動きにだけ追随するのではなく、この国の風土にマッチした、合理的な近代化をめざして、これから改良をくわえていくことがのぞまれよう。

屋根にかぎらず、よろず「近代化」すなわち「西欧化」としてことたれり、とされているものの中身を、いまいちど、この国の風土にあわせて再検討する必要があるものが、ほかにもあるのではないだろうか。

柱



日本のすまいにおける柱の意味は、むかしといまでは、大きくちがってきている。

二〇世紀最大の建築家のひとりであるル・コルビュジエ（一八八七—一九六五）は、「ヨーロッパの建築の歴史は、窓との格闘の歴史である」といったが、そのいいかたをかりると、「日本の建築の歴史は、柱との格闘の歴史である」といえないこともない。コルビュジエがいう「窓との格闘」とは、石造やレンガ造を主体とするヨーロッパ建築では、石やレンガをつみあげてたかい壁をつくることはやさしいが、それに穴をあけて窓をつくることがむずかしい。すなわち、窓の